

## 異なるふたつの発話・筆記が

### 同じ語のトークンであることについて

菊池 翔士

#### 序論

以下の二つの文をノートにペンで書いたとしよう。

あの店の麻婆豆腐は辛い。

彼の作る麻婆豆腐は甘い。

上の文中の「麻婆豆腐」と、下の文中の「麻婆豆腐」は、紙に染み込んだ異なるインクであり、物理的対象としては異なる。しかしながら、これらは同じ語である。このように我々は、異なる発話や筆記に含まれる対象のあいだに、同じ語である、という関係を認めることがある。(なお、我々がここで同一性を問題としているのは、ふたつの語自体であり、これらのふたつの「麻婆豆腐」が言及しているものではない。したがって、あの店の麻婆豆腐と彼の作る麻婆豆腐が同じ麻婆豆腐であるのか、という論点は必ずしも重要ではない。)本稿で主に扱うのは、この「同じ語である」という表現によって示されている関係である。

以上の二つの「麻婆豆腐」の場合、それらが同じ語であるか否か、という問いに対して答えを与えることに、これらの語の属する言語の堪能な話者であるならば、何の躊躇もいらないように思われる。しかし、答えに迷うような場合も少なくない。ここでは二つの例を挙げる。第一の例は、語の発音の歴史的な変化である。語の綴りや発音の仕方は、しばしば歴史的に変化する。15世紀のイングランドでは、大母音推移と呼ばれる、大規模な発音の変化が生じているのだが、これにより、たとえば現代の英語話者による「name」の発音の仕方は、変化前の英語話者による「name」の発音の仕方とは、まるで異なるものとなっている。前者により発音された「name」と後者により発音された「name」が同じ語であるのか否か、という問いに対して、英語話者は迷いなく答えを与えることはできるのだろうか。肯定にせよ否定にせよ、「麻婆豆腐」の例と同じほどの確信をもって

答えることはできないだろう。第二の例は、同名である。たとえば、第44代アメリカ合衆国大統領のオバマと同じ名前であるとして、福井県の小浜市が話題になったことがある。このふたつの「オバマ」は同じ語と考えてよいのだろうか。これについても、「麻婆豆腐」のときほど迷いなく答えを与えることはできないはずである。素朴な言い方をすれば、これらはある意味では同じ語であり、ある意味では異なる語である、と答えたくるところだろう。

「name」と「オバマ」の例が示唆するように、「語」という語や「同じ語である」という表現は、日常的な使用において多義性を孕んでいるように思われ、多くの論者もこれには同意をしている。そして、この多義性と同様に、「同じ語である、とはどういうことであるのか」という問いに対する哲学者の答えもいくつかの見解に分かれている。本稿の主たる目的は、それらの見解を紹介し、それらの見解が、多義性を孕む「同じ語である」のどのような側面を捉えており、そしてどのような側面を捉えていないのか、という点を確認することにある。本稿では、代表的なものとして二つの見解を紹介するのだが、それらを便宜的に、古典的な形状説・意図説と呼ぶことにする。

なお、これらの説は、「同じ語である」の多義性の異なる側面を切り取っているため、(つまり、一見したところと同じ「同じ語である」という関係の定義を示そうとしているのだが、実のところは異なる関係について取り扱っているため、) それぞれの説のあいだに対立や論争はないのか、というと、そうではない。実際のところ、意図説は古典的な形状説に対する批判を通して現れた説である。では、どのような対立が生じているのか。主に以下の二つある。まず、いずれの説の定義も、我々の日常的な「同じ語である」という関係の理解からは大きくかけ離れた帰結を導いてしまうという欠点がある、ということが対立を招いている。以降の節で確認するが、これらの定義にしたがう場合、日常的には同じ語とみなして当然のものを、同じ語であるとみなさない事例や、日常的には同じ語とみなさないのが当然のものを同じ語であるとみなす事例が、しばしば現れる。(たとえば、古典的な形状説にしたがう場合、口頭で発話された「麻婆豆腐」とペンで筆記された「麻婆豆腐」は異なる語とみなされる。) それぞれの説の支持者は、対立する説があまりにも奇妙な帰結を導いてしまうことをしばしば指摘し、自説の優位を主張する。第二に、たとえ多義的であるのだとしても、哲学的な探究の対象として重要である語概念はそのうちのどれであるのか、という点においても対立が生じている。この第二の対立は、哲学の他のテーマの議論においてどのような立場をとっているのか、という点とも関わるものである<sup>1</sup>。

本稿は、上記の一つ目の対立点に注目し、二つの議論が語であるという関係を、どのようなものとして捉えているのかを確認することを目的とする。議論の順番としては、まず古典的な形状説を扱い、その次に意図説を吟味する。

## 1. 古典的な形状説

古典的な形状説によれば、語タイプは、永久不変の抽象的対象であり、語トークンは、その物理的具現化である。そして、ある対象が、ある語タイプのトークンであるためには、その語のトークンとして満たすべきある種の内在的で物理的な性質をもつことが、必要かつ十分である、と考えられている。（なお、古典的な形状説の場合、ここで問題となる性質は選言的性質ではない。このことは、次節で紹介される本説の問題点の多くにとって重要なポイントである。）つまり、この説によれば、前節の例における二つの「麻婆豆腐」の筆記は、何らかの同じ物理的性質をそなえているがゆえに、同じ語のトークンなのである。

## 2. 古典的な形状説に対する批判

この節では、古典的な形状説に向けられた批判をとりあげる。最初の四つの批判は Kaplan (1990) により述べられたものであり、最後は私によるものである。

一つ目の批判は、通時的な変化に関するものである。古典的な形状説からは、大母音推移の変化以前の英語話者によって発話された「name」と、現代の英語話者によって為された「name」は異なる語である、という帰結が導かれてしまう。というのも、現代の発話がそれをそなえていることにより語「name」のトークンとなっているような物理的性質を、変化以前の発話はそなえていないからである。同様の例は、日本語における百姓読みの定着などからも作ることができる<sup>2</sup>。もし、これらを同じ語とみなすことが、語概念にとって不可欠のものであると考えるのならば、これは望ましくない帰結であろう。以降では、このような事例を、通時的な変化の例、と呼ぶことにする。

二つ目の批判は、方言などに関するものである。たとえば、英語の「theater」という語は、地域によっては「theatre」という綴りで筆記されることもある。通時的な変化の事例と同様の理由で、古典的な形状説からすれば、これらは異なる語である、ということになってしまう。以降では、このような事例を、共時的な多様性の例、と呼ぶことにする。

三つ目の批判は同音異義語に関するものである。たとえば英語には、銀行を意味する「bank」と、土手を意味する「bank」がある。このふたつは起源からして異なっており、異なる語であるように思われる。(前者が古フランス語の「banc」に起源をもつものに対して、後者は古ノルド語の「banke」に起源をもっている。)しかし、古典的な形状説にしたがうと、これらは同じ語であるとされてしまう。というのも、前者の「bank」のトークンであるためにそなえているべき物理的性質は、後者の「bank」のトークンであるためにそなえているべきそれと変わらないからである。他にも、以下の二つの文を口頭で発話したとしよう。

彼は部屋のソウジをほとんどしない。

この問題は三角形のソウジを利用して解く。

上の文中の「ソウジ」と、下の文中の「ソウジ」は、音素としては区別がつかないものの、異なる語であると我々は考えている。しかし、これらもやはり、同じ語とみなされることになる。古典的な形状説にしたがうと、これらの「bank」や「ソウジ」のような同音異義語の存在を認めることができない。

四つ目の批判は、発話と筆記とのあいだの関係に主に関わるものである。我々は筆記された「掃除」と口頭で発話された「掃除」を同じ語であるとみなしている。しかし、古典的な形状説にしたがうと、これらは異なる語のトークンとなる。(繰り返しになるが、ある語のトークンであるために満たすべき物理的性質は、選言的性質ではないためである。)同様の問題は、漢字で表記された「掃除」と平仮名で表記された「そうじ」とのあいだにも生じる。

最後の批判は、明らかに語としては使用されていない対象に関するものである。以下の状況を想定しよう。目の前に、まっすぐな爪楊枝が7本ある。これらを使い、「 $1 \times 1 = 1$ 」という文のトークンを机の上に生産する、とする。このとき形状説は、左端の「1」として用いられている1本の爪楊枝を、「1」のトークンとみなす。これは、直観的にも問題のない帰結であろう。しかし、形状説の問題点は、この「1」として用いられている爪楊枝以外の、世の中に存在するすべてのまっすぐな爪楊枝もまた、「1」のトークンとしてみなしてしまう、という点にある。というのも、それらの爪楊枝もまた、「1」のトークンであるために満たすべき物理的性質をそなえているからである。同様に、地面に落ちているまっすぐな木の枝はすべて、英語の代名詞「I」のトークンであり、四角い窓の枠はすべて、日本語の名詞「口」のトークンである、ということになる。やはりこれも不条理な帰結

であるように思われる。これを語の過剰増殖の問題、と呼ぶことにする。

ここまで挙げられた批判はすべて、古典的な形状説にしたがう場合、日常的には同じ語とみなして当然のものを、同じ語であるとみなさない事例や、日常的には同じ語とみなさないのが当然のものを同じ語であるとみなす事例が存在するということを指摘するものである。しかしながら、前述したとおり、「同じ語である」という表現を我々は多義的に用いている。（とりわけ、通時的な変化の例における変化前後の「name」などは、ある種の文脈においては、異なる語であるとみなされることもあるだろう。）したがって、古典的な形状説の側からは「我々がとらえようとしている、同じ語であるという関係は、批判者がとらえようとしている関係とは異なるものであり、そのような二つの発話を同じ語とみなすことはない」といった方針の再反論を試みることは可能である<sup>3</sup>。

たしかに「theater」と「theatre」や、大母音推移の前後の「name」について考える場合、それらを異なる語であるとみなすこと（によって、古典的な形状説を守ること）には、それほど大きな違和感はないように思われる。したがって、通時的な変化や共時的な多様性の事例は、古典的な形状説にとって、さほどの脅威ではないのかもしれない。しかし、古典的な形状説にとって都合の悪い事例を「異なる語である」として処理する議論は、突き詰めると、極端にきめ細やかな語の個別化を招いてしまう。まず確認すべきは、同じ地域で、同時期に、明らかに同じ言語のもとで、おこなわれた発話のなかにも、豊富な多様性が観察されるということである。Wetzel (2008) は、そのような例として、Fudge (1990) による英語の発音についての調査の結果を挙げている。ファッジによれば、たとえば「extraordinary」という語を発音する際に、多くの英語話者は、非常に注意深く発音する場合、少し注意深く発音する場合、日常的に雑に発音する場合で、大きく異なる発音をしている。注意深さが抜けていくほど、音の数がより少なく、シンプルになっていくのである。そして、非常に雑に発音する際には、「ˈstrɔːnri」という発音記号で表されるようなものとなる。他にも同様の例として、Bromberger (2011) は前置詞の「in」についての例を挙げている。前置詞「in」は、あとに続く語が何であるかによって、発音が変化する。たとえば「in New York」と発話する場合と「in Paris」と発話する場合では、「in」の発音のされ方は異なるものとなる。具体的には、後者において「in」の「n」の発音のされ方は、「n」というよりも「m」に近いものとなっている。もし、古典的な形状説に固執するのならば、我々は「in New York」における「in」と「in Paris」における「in」を異なる語として区別しなければならないだろう。古典的な形状説を採用すると、このように不条理なほどきめ細やかな個別化を迫られるこ

とになる<sup>4</sup>。

以上のように、古典的な形状説の下での、同じ語である、という関係は、我々が日常的に「同じ語である」という表現により言及しているいかなる関係ともかけ離れたものである。次節で紹介するカプランの意図説は、古典的な形状説の抱えるこの問題点を、克服するものとして提案された説である<sup>5</sup>。

### 3. 意図説

あらかじめ、ことわっておかなければならないのは、カプランの提案した意図説には、不明瞭な点が多く含まれている、ということである。本稿は、カプランのアイディアの骨子のみを辿り、その抱える利点と問題点を指摘していく。

カプランは、意図説を、古典的な形状説の抱えていた問題点を克服した説として、提案している。どのような手段によって、意図説は、「theater」と「theatre」のような事例を、処理しているのだろうか。その議論の鍵となる概念は、復唱である。この復唱という概念は、以下のようにして、導入されている。

以下の思考実験を考えてみよう。私が、ある個体の名前、それは私が話しかけている人物によって知られているような名前であるかもしれないのだが、を述べる。被験者は、五つ数えるのを待ってから、その名前を復唱する。私が名前を述べ、被験者がその名前を述べる。私が次の名前を述べ、被験者がその名前を述べる。よって、私が「ルドルフ」と述べれば、被験者は「ルドルフ」と述べる。「アロンゾ」に対しては「アロンゾ」、「バートランド」に対しては「バートランド」、などといった具合である。我々は、被験者が、クリプキの用語でいうところの、寡黙 (reticent) であることを危惧しなければならないので、もし彼がその名前を復唱することに成功したのなら、彼に1ドルを与えることにする。[...]もし、このような仕方では話を用意するのならば、つまり、被験者が、強く動機づけられ、誠実で、寡黙ではなく、反射的、それが何を意味するにせよ、であるとするとすれば、この人物が話すとき、彼は聞いた名前をちょうど復唱しているのだ、と述べる傾向が我々には強くある。[...]ただ私は、その事例の記述からすると、彼のアウトプットを、その名前の復唱であると記述することに、我々が同意するであろう、ということでは明白である、と述べているのである。この復唱の概念は、私の構想において中心的なものである。(Kaplan 1990, 103)

この復唱の概念は、いくつかの重要な特徴をもっている。以下の引用で、それを確認しよう。

発話、あるいは筆記された語を、聞かれた、あるいは読まれた語と同一視する、ということは、ふたつの物理的具現化（ふたつの発話、ふたつの筆記、あるいは、ひとつの発話とひとつの筆記）のあいだの類似性についての問題ではない。むしろ、それは、個人の内側における連続性、意図についての問題、なのである。（Kaplan 1990, 104）

被験者の模倣能力（彼のアウトプットをインプットと似たものにする能力）がいかに貧しかろうとも、「うん。彼はその名前を復唱している。彼は彼にできる最善の仕方でもって、その名前を述べているのだ。」と述べるような状況を、我々は想像することができる。

我々を欺こうと決意し、聞いた名前を復唱するかわりにインプットを無視して、ただランダムに名前を発話する（あるいは、事前に用意したリストを、順番通りに暗唱する）ような、裕福で悪戯好きな被験者と、彼を比べてみよ。たとえもし、ふたつの事例においてアウトプットされた音声、偶然によって、インプットされた音声と同様に類似していたとしても、第一の事例が復唱の事例であるのに対し、第二の事例はそうではない。（Kaplan 1990, 104）

以上の引用から、カプランが導入した復唱という関係は、以下のような特徴をもつ関係である、と思われる。

- ・復唱は、ある人物に対して投げかけられた発話と、その人物からもたらされた発話とのあいだに成立するような関係である。
- ・復唱は、発話だけではなく、筆記のあいだにも適用される。
- ・復唱の成立にとって問題となるのは、対象間の類似性ではなく、模倣の意図の有無である。
- ・ある人物に対して投げかけられた発話と、その人物からもたらされた発話が同じ語である、ということにとって問題となるのは、それらのあいだの復唱関係の有無である。

なお、カプランが、復唱の成立にとっての模倣の意図や、同じ語であるという関係の成立にとっての復唱の成立を、必要条件・十分条件・必要十分条件のどれにあたるものとして考えているのか、は判然としない。この点については、後で意図説に対する批判を検討する際に注意しなければならないが、さしあたりは、必要十分条件であるとして議論を進めていくことにする。(このように捉えた方が、意図説の議論を理解しやすいためである。)

同じ語である、という関係が、この復唱の概念によって、どのように説明されるのかをより詳しく見ていく前に、補足を二つしておきたい。

一つ目は、これは意図説にとって重要なポイントであるのだが、この復唱の概念は、引用における思考実験のような特殊な事例だけではなく、我々のほとんどすべての発話や筆記に適用される、という点である<sup>6</sup>。たとえば、私が日常的に用いている「消耗」という発話は、元を辿れば、幼少時に私の周囲の大人によって為されていた「消耗」という発話の模倣である、と考えられる。このように考えると、ほとんどすべての発話・筆記は、別の発話や筆記の復唱である、と述べることができる。

二つ目の補足は、カプランが、二つの発話間の類似性を、どのように取り扱っているのか、という点である。カプランは、ふたつの発話が同じ語であることが、類似性には依存しない、と主張しているように思われるが、実際のところ、話者が何の語を使用しているのかを聴き手が判断する際には、類似性が大きな決め手となっている。このような判断において、類似性がヒントとなるということを、カプランは、どのように説明するのだろうか。カプランは、類似性は、話者が何の語を使用しているのかのヒントというよりも、むしろ話者の意図を探るためのヒントである、として処理している。発話された語が何であるのかは、類似性によって決まるわけではない。

さて、今のところ、復唱という概念を通じて、個人に対してインプットとして与えられる発話と、その個人からアウトプットとしてもたらされる発話が同じ語であるのが、どのようなときであるのか、という点が説明された。復唱という関係は、異なる人物の発話のあいだに成立するものであり、また、意図説においては、同じ語であるという関係は、推移的で対称的なものであると(明示的に述べられてはいないが)考えられているため、同じ語であるという関係は、ネットワークのようにして、様々な人物によって為された発話のあいだに、成立することになる。具体的に考えてみよう。「name」というカプランの発話は、カプランの父による「name」という発話の復唱であり、カプランの父のその発話は、彼の恩



師の「name」という発話の復唱である。そして、カプランの父の恩師のその発話は、彼の母の「name」という発話の復唱である。このように想定したとき、意図説によれば、カプランの「name」という発話と、カプランの父の恩師の母の「name」という発話は同じ語となる。このとき、ふたつの発話のあいだの類似性は、問題とはならない。模倣の意図、復唱を通じて、ふたつの発話は結びつけられているのである。このように、個々人によって為された「name」という発話は、復唱を通じて形成される発話のネットワークのなかのひとつの結節点として位置づけられる。そして、ふたつの発話・筆記が同じ語であるのは、(意図を必要十分条件と考える場合は、)それらが同じ復唱のネットワークのなかに位置づけられているときかつそのときのみに限る、ということになる。

#### 4. 意図説の利点

では、古典的な形状説に向けられた批判を、意図説がどのように回避しているのかを確認する。まずは、通時的な変化の例である。意図説によれば、現代の英語話者であるカプランによる「name」という発話は、復唱によるネットワークを通じて、カプランの父の恩師の母による「name」という発話とつながっているのであった。さて、このネットワークは、カプランの父の恩師の母が生まれるよりも遙か以前まで、つまり大母音推移が起こる前まで、遡れるのではないだろうか。たしかに、発音の仕方は変化してはいるものの、意図説は、復唱の成立に対して、類似性を求めない議論である。「name」のネットワークのどこかで、模倣の意図があったのにもかかわらず、誤った発音が生じ、それが普及した結果として、15世紀の発音の変化が起こったとするのならば、現代のカプランによる「name」という発話を、大母音推移以前の英語話者による「name」という発話と同じ語である、とみなすことは可能だろう。

第二に、共時的な多様性の例である。「theater」と「theatre」について考えてみよう。この場合も、通時的な変化の場合と同様に、ネットワークのどこかで、模倣の意図があったのにもかかわらず、誤った綴りによる筆記が生じ、その綴り方が一部の地域で普及したのだとすれば、アメリカ人による「theater」という筆記とイギリス人による「theatre」という筆記を同じ語である、とみなすことができる。

第三に、同音異義語の例である。意図説には同音異義語の存在の余地がある。異なるネットワークと対応している語が、同じ綴りや発音のされ方をしている、

ということは十分に考えられるためである。

第四に、発話と筆記のあいだの関係である。意図説は、口頭で発話された「掃除」と筆記された「掃除」を同じ語であるとみなすことができるのだろうか。カプランは、それが可能であると考えているように見受けられるが、私には疑問である。この点については、意図説の問題点を次節で検討するにあたって述べることとする。

最後に、語の過剰増殖の問題である。一部の例外を除き、ほとんどの爪楊枝は、カプランが述べたような模倣の意図とは無縁の対象である。したがって、それらはいかなる復唱のネットワークにも属しておらず、そもそも語ではない、という結論を導くことができる。

## 5. 意図説に対する批判

復唱関係の成立が、ふたつの発話が同じ語であることの十分条件であるのか、必要条件であるのか、というポイントは、意図説を批判するにあたり重要である。Cappelen (1999) は、十分条件と解釈した場合の意図説を、意図の十分説、必要条件として解釈した場合の意図説を、意図の必要説と呼び、以下のような批判を加えている。

まずは、意図の十分説に対して生じる問題を確認しよう。カプランは、模倣能力がいかに貧しかろうとも、復唱をすることはできる、と考えている。したがって、復唱として認められる発話が、模倣の対象とは似ても似つかないということがありうる。たとえば、模倣能力が著しく低い人物が、「復唱」という筆記を見て、その筆記を模倣する意図をもって、「復習」と筆記したと考えてみよう。この事例におけるふたつの筆記は、意図の十分説によれば、同じ語であるということになってしまう。以下では、このような事例を、判読不能の例、と呼ぶ。

一方で、意図の必要説をとり、たとえば（カプランは渋るであろうが）ふたつの発話間の類似性をさらなる条件として課すならば、判読不能の例にまつわる問題点は、回避することができる。しかし、意図説をこのように解釈した場合でも、困難な事例は存在する。以下のような状況を想定してみよう。金物屋の店主が、鉄の板をもっている。その板の表面は、部分的に錆びてしまっており、日本語の「営業中」という表現が、錆によって書かれているかのように見える。そして驚くべきことに、この錆による「営業中」は、意図せずに見れた偶然の産物である。店主は、これを面白がり、店が営業中であることを知らせるための看板として、

この鉄の板を利用するようになった。意図の必要説をとる場合、この鏝による模様は、「営業中」という語ではない、ということになってしまう。というのも、この「営業中」は、模倣の意図を伴って、話者が生産したものではないからである。しかし、それでは、この店主が鉄の板を通じて、店が営業中であることを通行人に対して伝えているのは、語の使用ではないのだろうか。以下では、この事例を、意図不在の語の例と、呼ぶことにする。以上の批判をもって、カペレンは、模倣の意図は必要条件としても十分条件としても妥当ではない、と結論付ける。

私は、もうひとつ批判を付け加えておきたい。この批判は意図の必要説に向けられるものである。意図説の主な強みは、通時的な変化や共時的な多様性をはじめとする古典的な形状説が抱えていた難点を回避できるところにある、とされている。しかし、意図説が認めることのできる語の多様性は、我々が語の多様性と考えるもののうちの、ごく一部分に過ぎないように思われる。意図説によって認めることのできない多様性の事例を、いくつか挙げることにしよう。よく知られているように、日本語の漢字は、太平洋戦争後に、旧字体から新字体へと改められた。これに伴い、それまで「戀」と筆記されてきた語が、「恋」と筆記されるようになった。これは、大母音推移前後の「name」と「name」の例と同様に、通時的な変化の例である。しかし、大母音推移の例とは異なり、「戀」と「恋」を同じ語とみなすことは、意図説には困難であるように思われる。というのも、いかなる「戀」という筆記と「恋」という筆記のあいだにも、模倣の意図を伴った復唱という関係は成立しないからである。したがって、「戀」という筆記が属している復唱のネットワークと、「恋」という筆記が属している復唱のネットワークは、断絶した異なるものということになる。このようなネットワークの断絶は、発話「恋」と筆記「恋」とのあいだにもあてはまるように思われる。発話と筆記のあいだに同じ語であるという関係を認められないということ、古典的な形状説に対する批判のひとつとして取り上げた以上、カプランは、意図説はそのような批判には晒されないと考えていたようである。しかしながら、模倣の意図を伴った復唱という概念によって、発話と筆記を結びつけるのは、困難ではないだろうか。同様の困難は、漢字で筆記された「恋」と、ひらがなで筆記された「こい」とのあいだや、アルファベットの大文字で筆記された「THEATER」と、小文字で筆記された「theater」のあいだにも、あてはまる。意図説は、大母音推移の前後の「name」や「theater」と「theatre」を同じ語であるとみなす一方で、これらの例については、異なる語である、とみなすように思われる。この線引きを、どのようにして正当化することが可能なのだろうか。また、もしこれらを意図説の下で同じ語である

とみなすことを望むのならば、復唱の概念に何らかの修正を施すことが必要であろう。

## 6. 結論

では、これまで挙げられた諸例について、ふたつの説から、どのような帰結がもたらされるのかを再確認しておこう。

	通時的な変化	共時的な多様性	同音異義語	発話と筆記	語の過剰増殖	極端にきめ細かな個別化	判読不能	意図不在
古典的な形状説	認められない	認められない	存在しえない	同じ語たりえない	起こる	招く	意図された語とは異なる語	語である
意図説	一部しか認められない	一部しか認められない	存在しうる	同じ語とみなすのは難しい	起こらない	招かない	意図された語と同じ語	語ではない

意図説に対する批判のなかで私が述べたように、通時的な変化・共時的な多様性・発話と筆記のあいだの関係、のような元々は意図説にとって有利な材料であると考えられてきた事例は、少なくともカプランの議論のままでは、上手く処理できているとは言い難い。これに関しては、意図説を維持するのならば、なんらかの修正が必要となるだろう。

<sup>1</sup> たとえば、固有名の意味論におけるミル主義と述語主義の対立は、同音異義語の存在を認めるのか否かという点と深く関わっている。このかかわりについては、四津 (2007) が詳しい。

<sup>2</sup> たとえば、「消耗」という語は、かつては「ショウモウ」ではなく「ショウコウ」と発音されていた。

<sup>3</sup> 実際のところ、Iida (2009) は通時的な変化の問題を、Bromberger (2011) は筆記と発話とのあいだに同じ語であるという関係が成立するという問題を、このような形で躲そうとしている。

<sup>4</sup> ただし、Bromberger (2011) のように、古典的な形状説が語の極端にきめ細やかな個別化を招くということを認めない論者もいる。

<sup>5</sup> カプランの意図説以外に、古典的な形状説の問題点を克服しようとした議論として、Cappelen (1999) や Alward (2005) によって提案されたものが挙げられる。彼らの議論は、意図説とは異なり、古典的な形状説の精神を受け継いだ、いわば新形状説とでも言うべきものである。この立場は、大まかに述べると、

ある物理的対象  $o$  がある語  $w$  であるのは、その対象が内在的で物理的な性質  $p_1, p_2, p_3, \dots, p_n$  のいずれかかをそなえているときかつそのときのみに限る。

という主張をおこなう。この主張は、古典的な形状説に向けられた批判を、「bank」のような同音異義語、語の過剰増殖の問題を除き、躲しうるように思われる。

<sup>6</sup> 例外として、たとえば、新しい語を創造した瞬間に為された発話は、いかなる発話の復唱でもないことがある。

[参考文献]

- Alward, Peter. 2005. "Between the Lines of Age: Reflections on the Metaphysics of Words," *Pacific Philosophical Quarterly*, 86, 172-87.
- Bromberger, Sylvain. 2011. "What Are Words? Comments on Kaplan (1990), on Hawthorne and Lepore, and on the Issue," *Journal of Philosophy*, 108(9), 468-503.
- Cappelen, Herman. 1999. "Intentions in Words," *Noûs*, 33(1), 92-102.
- Fudge, Erik. 1990. "Language as Organized Sound: Phonology," in *An Encyclopedia of Language*, Neville E. Collinge (ed.), Routledge, 17-37.
- Hawthorne, John, and Ernest Lepore. 2011. "On Words," *Journal of Philosophy*, 108(9), 447-85.
- Iida, Takashi. 2009. "How are Language Changes Possible," in *Ontology and Phenomenology: Franco-Japanese Collaborative Lectures*, Mitsuhiro Okada (ed.), Keio University, 75-96.
- Kaplan, David. 1990. "Words," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 64, 93-119.
- . 2011. "Words on Words," *Journal of Philosophy*, 108(9), 504-29.
- Wetzel, Linda. 2015. "Types and Tokens," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Fall 2015 Edition, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2015/entries/types-tokens/>>.
- 四津雅英. 2007. 「固有名の多義性説と語の存在論」, 『科学哲学』, 40(1), 67-79.